

# with casa

No.3 Autumn 2012 講談社MOOK 家と暮らしの賢人



good function!

たべる、ねる、しゃべる

「暮らしの道具」A to Z



# GALLERY

Text\_Taniyama Takeshi Photo\_Hidaka Masatsugu Coordination\_Sato Reiko

## ギャラリストがつくった、逃れの場所

フォトグラファーがどこにレンズを向けても絵になった。とはいえ、外観に強い主張はない。インテリアにもとりたてて装飾的な要素はなかった。あるとするば、風韻のようなものだろうか。

イギリス・ロンドンを拠点に活動するギャラリストのステュワート・シェイブ (Stuart Shave) さんは「週末や休暇をのんびり過ごすための“隠れ家”が欲しかった」と語った。シェイブさんはロンドンの中心街、リージェント・ストリートの近くにあるギャラリーを拠点にし、仕事柄世界中を飛び回っている。

「今週はニューヨーク、先週は香港、その前の週は……」

こうした日常からの避難場所がこの地だ。アジール、つまり休息のた



めの“聖域”だ。

「ステーブル・エーカー」(Stable Acre) と名付けられたこの家は、ロンドンから北ヘクルマで約2時間半、ノーフォーク州ハーバリングランド村の近くの農地に建つ。集落からも大きな道路からもずいぶんと離れている。そもそもは放牧場だったという土地である。

建物も元は馬小屋で、1990年代に家屋に改築されたものだ。その後、シェイプさんが買い取り、現在イギリスでもっとも注目されている若手建築家のひとりであるデービット・コーン氏に改築を依頼した。

リビング、ダイニング、キッチン、寝室、バスルームと、すべての部屋の窓が南に向かう。窓を開け放せば、眼前に広がる農村風景と室内とが一体化する。

「ここは農地ですから、家づくりにおいては土地柄に合ったデザインや

素材が大切だと考えました」

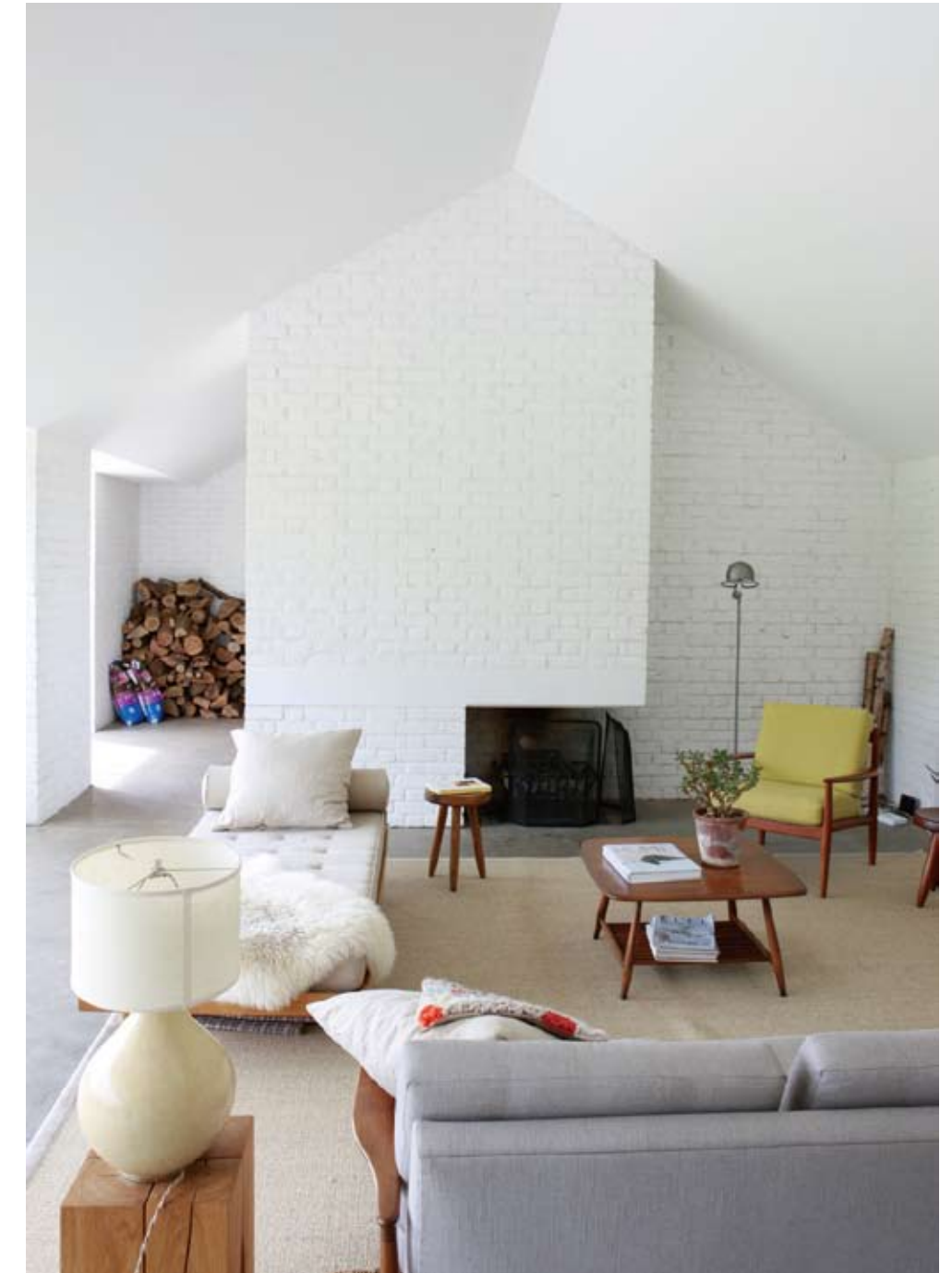
この志向が外観、インテリア、すべてを貫く。室内はラフな質感のレンガや板の壁、コンクリートの床が用いられていた。その空間には「ちょっとずつ集めた」という家具や雑貨が置かれている。

室内を見回してみると、意外に物が多い。そして“収納”の類は驚くほど少ない。

「物を片付けて、しまい込んで、すっきりみせるというミニマルさではなく、物を表に出しておいてもシンプルな空間であること」とシェイプさんは語った。

バスルームに置かれた、古道具のようなスツール。

リビングにひとり佇むようにレイアウトされた、素朴なつくりの本棚。寝室の窓辺でひなたぼっこする、小さな椅子。



たとえば、人に“気配”というものがあるがごとく、先に挙げた家具たちにもぼんやりと“気配”があるから不思議だ。

シェイプさんは言う。

「どこかに“手仕事”を感じられるものが好きなんです」

シャルロット・ベリアンのソファベッド、ジャン・ブルーヴェルのダイニングチェア、ピエール・ジャンヌレのテーブルといった、そうとうたる顔ぶれの家具もあれば、大量生産の品もある。

線路の幅木を使ったベッドのフレームは「友人がつくってくれたもの」といし、いたるところにある鉢植えは「友人が遊びに来るたびに持ってくるんですよ。それがどんどんたまってしまっ」という。

名のある物だろうとなんだらうと、それらは常に自然体で、そこに、物静かに、“居る”。だからこそたくさんの物に囲まれていても、シェイ

プさんは心身を休めることができるのだと思う。

シェイプさんはこの暮らしを「シンプル・プレジャー」と表現した。

窓を開ければ、自然しかない。

食材は近所の農家からわけてもらう。

ここに来たら、何もなし、何もしない。

家族や友人が集っても、ひとりきりで過ごしても、求めるられるのは「静寂」。

寝ても、食べても、会話しても、ここでは静かな時を過ごすのだ。

「庭にリンゴの木を植えています、いつもシカに食べられてしまうんです。今回の植樹で三度目ですよ」と言ってシェイプさんは笑った。

ステーブル・エーカーでの暮らしを賑わせるのは、せいぜい動物ぐらいのものだ。